

「他者を巻き込む行動」により地域に貢献する「自立女子」の育成
 ～グローバルな視野をもち地域課題解決の核となる人材育成プログラム～

学内での学びにもとづく学外での自主的活動の多様化

社会のトップ人材としてに限らず、多様に活躍するグローバル人材の育成

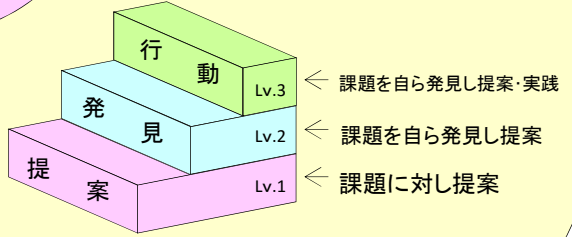
どの地域でも転用可能な、社会発展に資するスキルの伸長

知識・技能の獲得

スパイラル式に経験する

実践

内的動機づけ



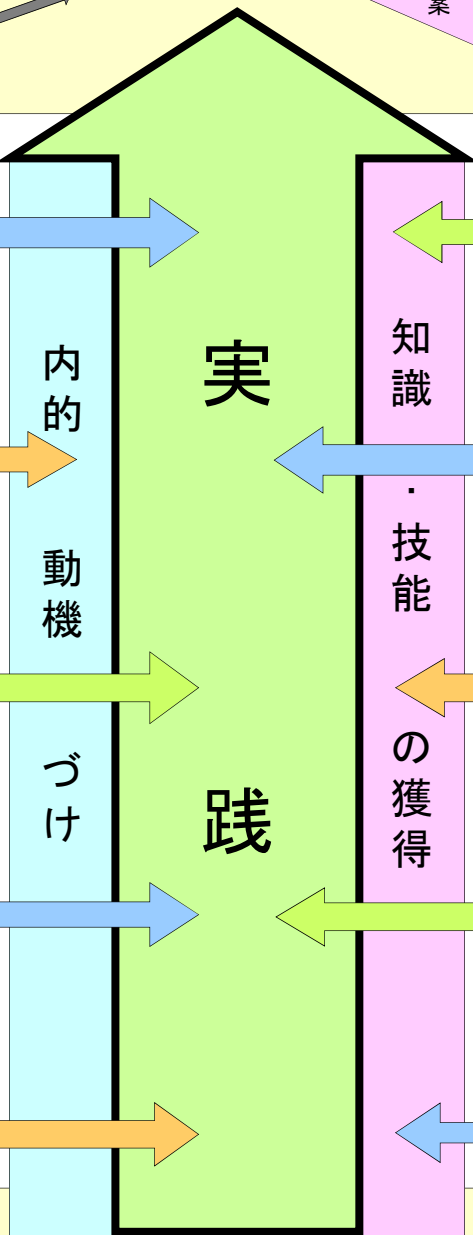
評価・リフレクション
 独自の8段階のルーブリック
 主体的な行動のために必要な力を評価
 自身のスキルをメタ認知する
 新たな課題発見
 内的動機を生み出す

輝く女性講演会
 地域で活躍する女性の講演会
 各学期に一度
 将来のロールモデル
 地域に貢献できる女性の育成

海外との交流
 3ヶ月留学・1年留学
 インドネシア・インドとの学校交流
 シンガポール・マレーシアへの修学旅行
 留学生支援団体
 ヤングアメリカンズ

Service as Action(行動としての奉仕)
 SDGs研究発表
 地元での貢献活動
 NGO・NPO・政府機関などでの体験学習
 コミュニティの課題解決に向けた活動

お弁当総選挙
 コンセプトの決定
 (デザイン・コスト・栄養価)
 お弁当プレゼンテーション
 商品化(業者との打ち合わせ)
 収益の一部を地域・海外に寄付



SD基礎・SD・TC
 地域課題・社会問題の理解
 身近な疑問からテーマを決める
 調査・実験・検証・提案
 3年間の研究論文を作成

育西フェスタ
 生徒実行委員会が企画・運営
 地域参画型フェスタ
 コミュニティとの交流
 地域課題の理解・発見
 他校との共同

クエストエデュケーション
 企画提案型プレゼンテーション大会
 (全国2万5千人が参加)
 提案力・協働力
 クリティカルシンキング力
 プレゼンテーション力

シナジータイム・タイ研修旅行
 社会人基礎力研究発表
 企画・提案・実行のノウハウを学ぶ
 タイでの社会貢献活動企画、実行
 社会・世界のための活動に他者を巻き込む

共同プログラム
 マップによる地域創造
 (フィールドワーク)
 奈良県立大学との共同開発
 大学生とのワークショップ型授業
 大学教授から地域課題を学ぶ

奈良育英中高

奈良県立大学

新学習指導要領

国際バカロレア

女子教育

立命館大学

育英西中高

育英小学校

奈良育英学園

奈良市福祉協議会

村井食堂

関西NGO協議会

ふりがな	ならいくえいがくえん	ふりがな	いくえいにしこうとうがっこう
管理機関名	奈良育英学園	学校名	育英西高等学校

2019年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 実施体制の概要

1 管理機関・学校の概要

(1) 管理機関名、代表者名

管理機関名：学校法人 奈良育英学園

代表者名：理事長 藤井 宣夫

(2) 学校名、校長名、研究を実施する学科

学校名：育英西高等学校

学科：普通科 専門学科 総合学科

校長名：北谷 成人

2 取組内容

本事業においては、中心となる事業推進校のこれまでの取り組みとその課題意識に基づき、中・長期的視点で地域課題を捉え、その解決に向けて主体的に行動する人材、特に「他者を巻き込む行動」の核となる人材を育てることをめざす。事業推進校は「知識・技能の獲得」「内的動機付け」「実践」という各過程をスパイラル式に経験し、その過程を生徒自身がメタ認知することで、「他者を巻き込む行動ができる力」は得られると仮説を立てた。

事業推進校は進路目標の異なる3つのコースを有する女子校であり、それぞれのコース生徒のニーズを下記のように位置づける。

特設コースⅠ類；AO入試や推薦入試を進路決定に活用する生徒も多い。従来の学力のみでなく、社会で生きるスキルが評価対象となることを踏まえ、学内の経験にとどまらない多様な経験と学びを求めている。

特設コースⅡ類；大学入試改革に伴い、従来の学力はもちろん、思考力・探究力を試される試験に対応できる力の獲得を必要とする。

立命館コース；立命館大学への進学を前提とすることから、高校在学中から進学後を見越し、学問に向かう姿勢や研究の素養をはぐくむことのできる環境を求めている。

前述の仮説を実証し、各コースのニーズに応じた教育開発を行うために、事業推進校には以下の研究に取り組ませる。

- ①学校設定科目として特設コースⅠ類を対象とした「シナジータイム」、立命館コースを対象とした「Science & Discovery」を体系化する。
- ②特設コースⅡ類を対象に新学習指導要領が重視する教科での探究的な学びを構築する。
- ③地域・世界とのつながりを生かして実現する行動実践が、生徒に与える影響を検証する。
- ④生徒に自らの力のメタ認知を促すための評価法を開発する。

①・②の研究開発にあたっては、コースの独自性を打ち出しつつ、全コース生徒がグローバルな視点を獲得できるよう特に留意させる。管理機関として、シンガポールにおいて実施している全員対象の海外研修を、探究的な取り組みとなるよう、海外アドバイザーとの連携支援を行う。また、留学生の長期受け入れを実現にも尽力する。③の研究開発にあたっては、管理機関としての取り組みを二点想定している。一点はコンソーシアムの拡大である。事業推進校を中心にすでに連携が始まっている団体を中心にコンソーシアムを構成したため、早期からの実働が期待される。その取り組みをより充実したものとするため、新たな団体のコンソーシアムの加入促進や個々の連携にとどまらないコンソーシアム全体としての連携体制構築に努める。もう一点は支援費の効果的な運用である。生徒の「行動」のフィールドを広げるための、海外への生徒渡航費用の一部補助等に取り組む。

3 管理・運営方法

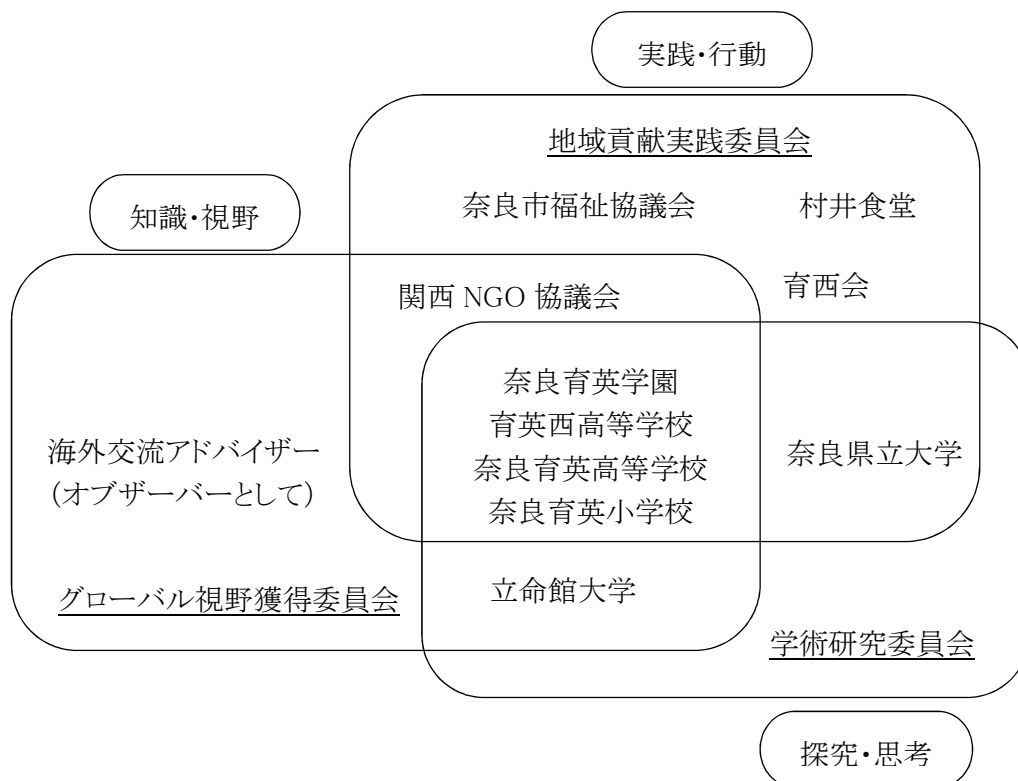
(1) 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
学校法人 奈良育英学園(管理機関)	理事長 藤井 宣夫
学校法人 奈良育英学園(管理機関)	事務局長 竹田 基宏
育英西高等学校(推進校)	校長 北谷 成人
奈良育英高等学校(協力校)	校長 沼田 守弘
奈良育英小学校	校長 東 誠司
育西会 *事業推進校 PTA 組織	会長 廣瀬 昇
特別非営利活動法人 関西 NGO 協議会	代表 藤野 達也
社会福祉法人 奈良市福祉協議会	会長 福井 重忠
公立大学法人 奈良県立大学	学長 伊藤 忠通
有限会社 村井食品	社長 村井 猛
学校法人立命館 立命館大学	学長 仲谷 善雄

(2) 将来の地域ビジョン・求める人材像等の共有方法

本コンソーシアムの加盟団体は、ほぼ本事業推進校である育英西高等学校とすでに研究開発を行っている団体である。従って、同校を中心とした地域ビジョン・求める人材等の共有は、概ね出来ていると考える。今後は、定期的に研究発表会やコンソーシアムを実施すること、研究報告書発刊することを通して、地域ビジョン・求める人材等についての共有は確固たるものになると考える。

(3) コンソーシアムにおける研究開発体制



(8) 管理機関又はコンソーシアムによる主体的な取組・支援

業務内容	実施日程 (2019年4月1日～2020年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
研究開発支援	←											→
コンソーシアム開催	○										○	
推進校、協力校、小学校への研究成果報告提出の指示									○			
推進校、協力校、小学校への次年度研究計画策定指示												○
海外研修企画立案							○					
高校教員の事務業務の支援・補助	←											→
地域協働学習支援員の契約、派遣	←											→
立命館を始め連携大学との協定更新									○			
保護者のための講演会				○								○
運営指導委員会実施	○										○	

(9) 事業終了後の継続的な取組の実施に向けた計画

本事業終了後、地域協働学習実施支援員を継続して雇用し、その人件費等にかかる費用及び海外研修への引率者旅費、生徒旅費の一部補助は、管理機関である学校法人奈良育英学園が、支払う予定。本事業が継続的に実施できるよう、管理機関から推進校・協力校に、2020年度以降の事業計画策定を指示する。従来、本事業推進校のPTA組織である育西会では、保護者のための講演会を年に2回実施してきたが、コンソーシアムを継続して設置することで、この事業を地域のニーズに沿った講演会とし、地域住民にも開かれたものとする予定である。

2019年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究開発の概要

指定期間	ふりがな	いくえいにしちゅうがっこう・こうとうがっこう				②所在都道府県	奈良県
2019～2021	①学校名	育英西中学校・高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	中学校 207名 高等学校 476名 計 683名 (高等学校は特設コースⅠ類、Ⅱ類、立命館コースの計3コースを有する。)	
	中学校	85	58	64	207		
高校(普通科)	144	173	159	476			
⑥研究開発構 想名	「他者を巻き込む行動」により地域に貢献する「自立女子」の育成						
⑦研究開発の 概要	「他者を巻き込む行動」の核となる人材の育成をめざし、本校設置コースに応じた探究カリキュラムを体系化し、生徒の行動につなげ、それらの評価法を開発する。生徒が「知識・技能の獲得」「内的動機付け」「実践」の各過程をスパイラル式に経験し、その過程をメタ認知できるようになることに重点を置く。						
⑧ 研究 開発 の 内 容 等	⑧ -1 全 体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>中・長期的視点で地域課題を捉え、その解決に向けて主体的に行動する人材、特に「他者を巻き込む行動」の核となる人材を育てることを目的とし、下記の研究開発に取り組む。</p> <p>①学校設定科目として特設コースⅠ類を対象とした「シナジータイム」、立命館コースを対象とした「Science & Discovery」を体系化する。</p> <p>②特設コースⅡ類を対象に新学習指導要領が重視する教科での探究的な学びを構築する。</p> <p>③地域・世界とのつながりを生かして実現する行動実践が、生徒に与える影響を検証する。</p> <p>④生徒に自らの力をメタ認知を促すための評価法を開発する。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>進路目標の異なる3コースをもつ本高等学校は2020年度大学入試改革に先駆けて、一部教科においては課題解決型の学びを全コースで導入した。また探究的な学びの手法の獲得、課題研究を目的とした学校設定科目を一部コースでは設置してきた。</p> <p>しかし、これらの先行的な取り組みを実施する中で、どのコースにもいまだ共通する課題があると認識している。それは課題解決に際し、解決策の提案にとどまりがちな点である。将来地域人材として地域課題の解決に資する女性の育成にあたっては、この現状を打開し、「行動する力」とりわけ「他者を巻き込む行動ができる力」を培う必要がある。</p> <p>一方本中学校では、2015年度から協働学習をねらいとした「シナジータイム」を設置し、国際バカロレアのATL (Approach to Learning) を参考に、生徒が身に付けるべきスキルを整理し、その獲得をルーブリックで評価、生徒に還元してきた。1期生である現高校2年生が、タイでの貢献活動実現に向けて現地を訪問するなど、その成果が「行動」という形で表れつつある。また、現在国際バカロレア MYP 候補校として、教科における「概念」中心の探究的学びや、自分の関心に応じて地域や世界の課題のために活動するの取り組みを進めている。中学生ながら自ら地域貢献活動を企画・実行できる生徒も出ている。</p> <p>そこで、「知識・技能の獲得」「内的動機付け」「実践」という各過程をスパイラル式に経験し、その過程を生徒自身がメタ認知することで、「他者を巻き込む行動ができる力」は得られると仮説を立てる。本校の研究開発が研究題材とする教育活動はいずれも前述の各過程の経験とメタ認知を担保するものとなる。</p> <p>各過程が具体的にめざすものは以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知識・技能の獲得；従来の学力観における基礎学力。 得られる幅広い視野やものごとを多角的に見る視点。 汎用的思考力、コミュニケーション力、協働力。 ・内的動機付け；学びに向かう主体性。 ・実践；主体性をもって行動する力 					

	<p>(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</p> <p>◎地域と協働した課題研究を実施する科目</p> <p>現在も実施している課題研究を目的とした「シナジータイム」「S.D.」の体系化をめざす。「シナジータイム」は協働学習に主眼を置き、課題発見、企画、実行、振り返りのサイクルを多く経験することで10のスキル(※)の獲得をねらいとする。「S.D.」は生活に根ざした身近な疑問をもつことを出発点に、関連する知識を獲得して、テーマを決定、実験・調査・検証・提案等研究の流れを経験し、研究の素養を身につける。これらを本研究開発の目的に合わせ、さらに以下の変更を行うことでプログラムの向上を期する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇両科目とも地域ないしは世界に関連付けた課題研究を行い、地域や社会課題の改善に資することをめざす。 ◇両科目とも「他者を巻き込む行動」の実現をめざす。 ◇「シナジータイム」は2019年度入学生より各学年に1単位ずつ科目として設定する。 ◇「S.D.」は理系分野に特化していた課題設定を、文理の枠にとらわれず行う。 ◇高校3年立命館コースにおける「T.C.」を「S.D.」の発展的科目として位置づける。 <p>「T.C.」においては研究成果の論文化に焦点をあてた内容とする。</p> <p>※10のスキル；国際バカロレアのATL(Approach to Learning)をもとに作成</p> <p>コミュニケーション・協働学習・組織・情動コントロール・ふりかえり・情報リテラシー・メディアリテラシー・批判的思考・創造的思考・思考転移</p> <p>◎探究的な学びを実施する各教科</p> <p>2022年度以降に施行される新学習指導要領が重視する探究的な学びを、先取りする形で実施し、教科学習の中に、探究の素養を身につける取り組みや探究を経験できる取り組みを設定する。特に、知識・技能の獲得や課題提案にとどまらず、世界的視点もしくは地域に根ざす視点、またその双方をもった行動につながる取り組みを提供する。</p> <p>(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制</p> <p>前述の計画に基づいて実施するが、2学期末には一定の検証を行い、カリキュラムや単位数、授業内容が妥当であるかを検討して、変化や改訂の案を立て、職員会議で承認を得る。特にシラバスの共有により、教科横断的取り組みや探究的な学びの実施に向けた体系的指導をめざす。授業等の人的体制、物的体制の妥当性については、各部および教科から推進委員が吸い上げ、見直しを図る。研究開発の3年間においては、計画に固執することなく柔軟によりよいカリキュラムのありかたを模索し、弾力的に改革を進めていく。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等</p> <p>「総合的な学習の時間」3単位を、特設コースI類においては「シナジータイム」3単位に、立命館コースにおいては「S.D.基礎」(1単位)「SD」(3単位のうち1単位)「T.C.」(1単位)にそれぞれ読み替える。</p>
<p>⑨その他特記事項</p>	<p>「地域と世界を関連させた学び」の想定について、二つの事例に基づいて記述する。</p> <p>家庭科の授業として考案していた身近な人のための「お弁当」を、2015年度より地元企業である食堂業者の協力で商品化し始めた。このことを契機に、生徒の発案により生まれた利益の一部を海外NPO団体に寄付するというグローバルな取り組みが生まれた。さらに、本取り組みを評価いただいた奈良市福祉協議会との縁をきっかけに、孤立しがちな地域の子ども・若者・高齢者の居場所づくりの事業に、本校のお弁当が採用され、本校生徒が支援者として参加するというローカルな活動が生まれた。</p> <p>また、高校1年生の「シナジータイム」の集大成として、2018年度3月に実施されたタイ研修旅行では、支援者としての視点だけでなく、生徒が日本の地域課題解決という視点でタイに学ぶことも目的とした。そこで得た気づきは下級生にも共有される。</p> <p>上記のように、本校で先進的に取り組んでいる輻輳的視点や、教科内外をつなぐ視点、学年縦断的視点をもった教育活動を今後さらに開発していく。</p>